

- 原著 -

舌癌，口底癌一次再建例の治療成績と術後機能

福西雅史，星名秀行，永田昌毅、長島克弘，藤田 一，
宮浦靖司，宮本 猛，相馬 陽，関 雪絵，高木律男

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面口腔外科学分野
(主任：高木律男教授)

Clinical evaluation of primary reconstruction
in carcinoma of tongue and oral floor

Masashi Fukunishi, Hideyuki Hoshina, Masaki Nagata, Katsuhiko Nagashima,
Hajime Fujita, Yasushi Miyaura, Takeshi Miyamoto, Yoh Sohma,
Yukie Seki, Ritsuo Takagi

*Division of Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata University
Graduate School of Medical and Dental Sciences
(Chief: Prof. Ritsuo Takagi)*

平成15年5月1日受付 5月1日受理

Key words : primary reconstruction, carcinoma of tongue, carcinoma of oral floor, clinical result, postoperative oral function

キーワード：一次再建，舌癌，口底癌，治療成績，術後機能

Abstract: To estimate the survival rate and postoperative functions, we have evaluated the 30 cases (male: 27, female: 3, average: 56.6 years of age, ranged from 24 to 77 years of age) with oral cancer reconstructed with a pedicled or a free flap for 26 years from 1976 to 2001. The sites of involvement were the tongue in 13 cases and the oral floor in 17 cases. The postoperative articulation, mastication and swallowing were studied as oral functions.

As results of investigation, 5-year cumulative survival rates were 69.2% in the tongue group and 81.4% in the oral floor group. Flaps survived completely in 26 (86.7%) cases, partial necrosis occurred in 4 (13.3%) cases, and no total necrosis took place.

The postoperative oral functions were still remained in almost all cases which were applied the partial or hemiglossectomy or the resection of the lateral portion of the oral floor. However, the cases in resection of anterior portion of the oral floor had a little dysfunction, and many cases of the subtotal glossectomy revealed relative severe dysfunctions. As to occlusal function, it depends on the prosthetic conditions to some degree.

These results suggest that it is very important for high quality of life to select the appropriate resection and reconstruction, and furthermore, postoperative rehabilitation for swallowing and speech and prosthetic treatment for mastication are very important for not only morphologic reconstruction but also the postoperative oral functions.

抄録：1976年から2001年までの26年間に、有茎および遊離皮弁による一次再建手術を施行した舌癌13例，口底癌17例，計30例（男性27例，女性3例。24～77歳，平均56.6歳）について，治療成績および術後機能を評価した。術後機能は会話明瞭度，咀嚼機能，嚥下機能の3項目について評価した。その結果，5年累積生存率は舌癌69.2%，口底癌

81.4%であった。また、皮弁の生着は、完全生着が26例(86.7%)、部分壊死が4例(13.3%)で、全部壊死はなかった。一方、術後機能については、舌部分切除例、口底側方切除例、舌口底半側切除例ともに、比較的良好に温存されていた。しかし、口底前方切除例では機能の低下がみられ、舌垂全摘例においては、重度の機能障害が残っていた。さらに、咀嚼機能では歯の欠損もともなうため、補綴処置が不可能な場合には十分な機能回復が得られていなかった。

以上より、適切な切除範囲の設定、再建方法の選択などがQOLの維持のために重要であり、さらに術後には嚥下および言語訓練などのリハビリテーションの実施、さらに咀嚼機能のための補綴的処置が形態の再建のみでなく口腔機能の回復において非常に重要であると思われた。

緒 言

近年、有茎皮弁および遊離皮弁を用いた再建術の発達により、頭頸部領域においても進行癌症例に対する根治的切除手術が可能となった。特にマイクロサージェリーによる血管柄付遊離組織移植が急速に普及し、手術適応の範囲が広がりつつある¹⁻³⁾。これらの方法は、形態の回復とともに機能障害を最小限にすることを目的に用いられるが、手術の複雑化に伴い、皮弁壊死や後出血などの問題も生じており^{1,3-5)}、術後機能評価を含めた治療成績を検討する必要がある。

当科では開設当初より、有茎皮弁としてDeltopectoral flap(以下DP皮弁)による再建を中心に行ってきたが、1980年からは新潟大学医学部形成外科からご協力いただき、前腕皮弁を中心とした血管柄付遊離皮弁を導入するようになり、患者の年齢、全身的合併症、切除範囲、手術時期などを考慮して再建方法を選択している。

今回、私たちは当科において腫瘍切除および一次再建術を施行した舌癌および口底癌を対象に、治療成績および術後機能について評価したので報告する。

対象および方法

1) 対象症例

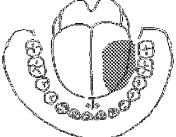
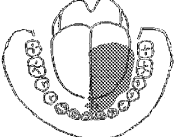
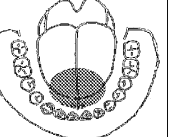
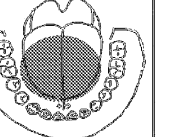
対象症例は新潟大学歯学部附属病院口腔外科顎顔面外科診療室(旧第2口腔外科)において、1976年から2001年までの26年間に、有茎および遊離皮弁による一次再建手術を施行した舌癌13例、口底癌17例、計30例である。性別は男性27例、女性3例で、手術時年齢は24歳から77歳、平均56.6歳であった。組織型は扁平上皮癌27例、腺様嚢胞癌2例、粘表皮癌1例で、全例のT分類はT1:4例、T2:16例、T3:2例、T4:8例であった。また、Stage分類はStage Ⅰ:3例、Stage Ⅱ:6例、Stage Ⅲ:5例、Stage Ⅳ:16例と、進行例が多数を占めていた。

なお、全例において頸部郭清術を施行しており、外科療法以外の治療方法としては、術前に放射線療法を6例、化学療法を30例、術後に放射線療法を15例、化学療法を27例に施行した。

2) 切除範囲と再建方法(表1)

切除範囲は、舌部分切除・口底側方切除、舌口底半側切除、舌口底前方切除、舌垂全摘の4型に分類した⁶⁾。

表1 舌癌・口底癌の切除範囲と再建方法

切除分類	1	2	3	4	計
	舌部分切除・口底側方切除	舌口底半側切除	舌口底前方切除	舌垂全摘	
切除範囲					
下顎骨区域切除	2	2	1	5	10
DP皮弁	3	7	2	2	14
前腕皮弁 (FA)	4	2	5	2	13
大胸筋皮弁	—	—	—	1	1
腹直筋皮弁	—	—	—	1	1
腓骨皮弁	1	—	—	—	1
症例合計	8	9	7	6	30